

國學院大學學術情報リポジトリ

ワークショップ「生活の中で直面する世界の宗教文化：食・服装・忌避などへの理解」

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000568

ワークショップ「生活の中で直面する世界の宗教文化 ——食・服装・忌避などへの理解」

「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」プロジェクトでは、「宗教文化教育推進センター」と連携し、学生や一般の方々に宗教文化の学びが現代の日本社会にとっていかに重要かを理解してもらうため、仕事や生活の場で宗教に関わる問題に対応する機会を持つ方に現状を報告してもらい、ディスカッションをするためのワークショップ、「生活の中で直面する世界の宗教文化—食・服装・忌避などへの理解」を開催することとした。開催概要は次のとおりである。

【日時】 6月29日（土）15時～18時

【会場】 國學院大學渋谷キャンパス1101教室

【登壇者】

1. 岩元陽子（NPO法人 MICかながわ 英語通訳・派遣コーディネーター）

「医療現場における宗教文化への対応 —医療通訳者の視点から—」

2. カーン・恵理子（合同会社Crossbridge 代表、食のバリアフリー推進協議会 代表）

「ムスリムとして日本に暮らすこと。その課題。」

【指定討論者】

井上順孝（國學院大學）、矢野秀武（駒澤大学）、板井正斉（皇學館大学）

【司会】

平藤喜久子（國學院大學）

【主催】 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所、宗教文化教育推進センター

以下にそれぞれの講演の内容を簡単に紹介する。

最初の登壇者である岩元陽子氏は、神奈川県で医療通訳者として活躍をしている。神奈川県には、外国人が医療を受ける場合の通訳を派遣するシステムとして、神奈川県の国際課と民間のMICかながわの協働事業として「かながわ医療通訳派遣システム」がある。2002年の発足以来、69病院と協定を結び、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国朝鮮語、タガログ語、タイ語、ベトナム語、カンボジア語、ラオス語、ロシア語、フランス語、ネパール語という13言語に対応し、204名（2019年3月末）の通訳者の業務が行われている。このシステムの運営に関わる通訳者として、医療の現場で宗教文化の問題に直面した経験を具体的に挙げて紹介して頂いた。



岩元陽子氏

医療通訳は、医療現場で「異なる言語や文化をもつ医療従事者と外国人患者」の間でコミュニケーションを成立させるために活動を行う。外国人患者は、その通訳の存在により、さまざまな疑問、不安を解消し、医療への安心や信頼を得ることができ、また医療従事者も安心して適切な医療を受けることができるというメリットがある。基本的には、当事者

間の言葉を正確に、忠実に、意見などを介さずに訳すことが求められるが、ときに文化や習慣などの違いから誤解や不信感が生じたときなどは、通訳者が文化的な知識の補足や説明を行うことで理解を助ける必要があるため、日本および外国人、双方の文化についての理解や知識が必要になるという。

宗教に関しては、日本の医療機関は一般的に受付時に宗教のことを把握するというところを行わず、対応マニュアルも作成されていない場合がほとんどである。とくに問題が起きやすいのが、医療従事者と患者の性の組み合わせで、主治医の制度を取っていない病院に於いて、つねに女性患者が女医を希望するといったことが外国人の患者の場合には起こっているという。そういったケースについては、通訳者の仲介によって落としどころを探ることが行われる。

難しい例としては、エホバの証人の信者である外国人妊婦のケースが紹介された。エホバの証人については、日本でもかつて医療の現場で問題が起こったことがあるため、その後のディスカッションでも質問や意見が出た。



カーン・恵理子氏

次に登壇したカーン・恵理子氏は、自身が外国人のムスリムの方と結婚し、イスラームに改宗したムスリマとして日本で暮らし、子育てもしている。その経験に基づき、ムスリムとして日本で暮らしていくときの課題を語っていただいた。

ハラールについての基本的な知識について

紹介するなかで、ムスリムが「食べられるものはなにか」という発想ではなく、「ムスリムが食べられないもの」「使えないもの」を知ってもらいたいと述べていた。またムスリムの冠婚葬祭についての考え方や子供の学校行事への考え方、地域での暮らしのことなど、日々日本で暮らすなかで直面する誤解や偏見などについて、具体的な事例を挙げて論じた。



ディスカッションの際には、とくに子育てに関わる場所で質問が多くでて、日本の学校教育の場でムスリムの子供たちが増えていく現状のなか、課題を具体的に知りたいというニーズがあることがわかった。

カーン氏は、Crossbridge (<http://crossbridge-project.com/>) というムスリム対応のコンサルティングやサポート業務を行う団体を主催している。そこで進めていることのひとつが「食のバリアフリー」で、ピクトグラムを用いて、料理や商品に入っている原材料を提示する活動を広める取り組みを行っている。終了後には、日本文化研究所の教員、宗教文化教育推進センターの運営委員、登壇者の方々に、実際にハラールでピクトグラムを用いて食材を示している料理を囲み、より具体的に現場の話を知ることができ、有意義な学びとなった。

(平藤喜久子)